

南北

横光利一

青空文庫



## 一

村では秋の収穫時が済んだ。夏から延ばされていた消防慰労会が、寺の本堂で催された。  
 ようやく一座に酒が廻った。

その時、突然一枚の唐紙からかみが激しい音を立てて、内側へ倒れて來た。それと同時に、秋三と勘次の塊りは組み合つたまま本堂の中へ転り込んだ。一座の者は膝を立てた。

暫くすると、人々に腕を持たれた秋三は勘次を睥にらみ乍ら、裸体の肩口を押し出して、「放せ、放せ。」と叫んでいた。

勘次はただ黙つて突き立つたまま、ひた押しに秋三の方へ進もうとした。  
 「今日という今日は、承知せんぞ！」

「何にッ！」

二人は羽がい締めにされた鬪鶏のように、また人々の腕の中で怒り立つた。

「放してくれ、此奴逝こいいわさにや、腹の虫が納るかい。」

「泣きやがるな！」

「何にツ！」

秋三は人々を振り切つた。そして、勘次の胸をめがけて突きかかると、二人はまた一つの塊りになつて畳の上へぶつ倒れた。酒が流れた。唐の芋が転がつた。

「<sup>ほう</sup>抛り出せ。」

「なぐれ。」

「やれやれ。」

騒ぎの中に二人の塊りは腰高障子を蹴脱<sup>はず</sup>した。と、再びそこから高縁の上へ転がると、間もなく裸体の四つの足が、空間を蹴りつけ裏庭の赤万両の上へ落ち込んだ。葛<sup>くず</sup>と銀杏<sup>いちょう</sup>の小鉢が蹴り倒された。勘次は飛び起きた。そして、裏庭を突き切つて墓場の方へ駆け出すと、秋三は胸を拡げてその後から追つ駆けた。

## 一一

本堂の若者達は二人の姿が見えなくなると、彼らの争いの原因について語合いながらまた乱れた配膳を整えて飲み始めた。併し、彼らの話は、唐紙の倒れた形容と、秋三の方が

勝味であつたと云うこと以外に少しも一致しなかつた。が、この二人の争いは、彼らにとつて眼新しいものではないらしかつた。彼らの話に拠ると、二人の家は村の南北に建つていて、二人の母は姉妹で、勘次の母は姉であるにも拘らず、秋三の家から勘次の父の家へ嫁いだものであつた。けれども此の南北二家は親戚関係の成り立つた当夜から、既に絶縁同様になつていた。と云うのは、秋三の祖父が、血統の不浄な貧しい勘次の父の請いを拒絶した所、勘次の母は自ら応じてその家へ走つたことから始まつた。祖父の死後秋三の父は莫大な家産を蕩尽して出奔した。それに引き換え、勘次の父は村委会を圧する程隆盛になつて來た。そこで勘次の父は秋三の家が没落して他人手に渡ろうとした時、復讐と恩酬おんしゆとを籠めたあらゆる意味において、「今だ!」と思つた。そして、妻が反対したのに拘らず、彼は妻の実家を立て直して翌年死んだ。以後勘次の家は何事につけても秋三の家の上に立つた。で、何物にも屈伏することを好まない青年の自尊心を感じることの出来る者達程、此の日の二人の乱闘の原因も、所詮酒の上の、「箸で突いた」程度のことから始まつたと自然な洞察を下して、また酒盃をとり上げた。

併し此の噂は村の幾宵いくよきを騒がせた。そして、軽て来る冬の仕事の手始めとして、先ず柴山の選定に村人達が悩み始める頃迄続いていつた。

## 三

まだ夕暮には時があつた。秋三は山から下ろして來た柵の柴を、出逢う人々に自慢した。そして、家に着くと、戸口の処に身体の衰えた男の乞食が、一人彼に背を見せて蹲んでいた。

「今日は忙しいのでのう、また来やれ。」

彼が柴をかいだまま中へ這入ろうとすると、

「秋か？」と乞食は云つた。

秋三は乞食から呼び捨てにされる覚えがなかつた。

「手前、俺を知つているのか？」

「知るも知らんもあるものか。汝大きゆうなつたやないか。」

秋三は暫く乞食の顔を眺めていた。すると、乞食は焦点の三に分つた眼差しで秋三を斜めに見上げながら、

「俺は安次や。心臓をやられてさ。うん、ひどい目にあつた。」と彼から云つた。

秋三は自分の子供時代に見た村相撲の場景を真先に思い浮かべた。それは、負けても賞金の貰える勝負に限つて、すがめの男が幾度となく相手関わらず飛び出して忽ち誰にも棹のよう<sup>かま</sup>に倒されながら、なお眞面目にまたすがめをしながら土俵を下つて来る処であつた。彼は安次だ。安次は両親と僅に残された家産を失くすると、間もなく軽蔑された身体を村から消した。最早やそれから九年も経つた。が、今、また秋三は彼を見たのであつた。

「ほんに、お前安次やつたのう。なんと汚い身体になつたもんやないか。触つたら苔<sup>こけ</sup>がめくれて来うが？」

「お母<sup>かあ</sup>を呼んでくれんか？」

「今日はおらんぞ。お前これから何処へ行くつもりや？」

秋三は柴を下ろしながらそう云うと安次の傍へ蹲んだ。

「何処つて、俺に行くところがありや結構やさ。」

「帰つて來たんか？」

「帰つたんや。医者がお前、保たん<sup>も</sup>云いさらしてのう。心臓や。」

「心臓か、えろう上品や病やのう。」

「うむ、もう念佛や。お母はおらんか。」

「お母に何ぞ用があるのか？」

「お前どこで世話をなろうと思うて いるがの、一つ頼んでくれんかなア？」

「お前、俺どこへ来たのか？」

「うむ、医者めが、もたん云いさらしてさ。」

「それで俺どこへ転げ込んだのやな？」

「お前、酒桶からまくろれ落つて、土台もうわやや。お母に頼んでくれよ。おらんのか？」

「好え加減にしどけ。」

秋三は立ち上つた。

「おい、頼む頼む。お母に一寸云うてくれつたら。」

秋三はそのまま黙つて柴を担ごうとする

「お前どこ、俺この母屋おもややないか、頼むで置かしてくれよ。」と安次は云つた。

「俺どこが母屋や？」

「そうとも、誰など聞いてみい。」

「縁起げんたれの悪いこと云うてくれるな。手前どこは谷川つて云うやら。俺どこは山本や。」

その時、秋三はふと勘次の家と安次の家とは同姓で、その二家以外に村には谷川と名附

けられる姓の一軒もないのに気がついた。してみれば、今安次を勘次の家へ、株内と云う口実で連れていつたとしたならば？ 勘次の母の りんしょく 喬加減を知つていればそれだけ、秋三には彼女の狼狽うろたえる様子が眼に見えた。それは彼にとつて確に愉快な遊戯であつた。

と、忽ち、秋三は安次を世話する種々な煩雜のがさから逃れようとしていた今迄の気持がなくなつて、ただ、勘次の家を一日でも苦しめてみることに興味を持つた。

「おい、南の勘とこへ行かんか。あいつはお前とこの株内や。」

「看屋さかなか。あんなけちんぼは、俺とこの株内やないぞ。」

「そうかて谷川つて云うのは、あの家一軒ばち有るか。お前とこの株内や。」

「だいたいあの家、俺は好かんのや。」

「贅沢ぬかしてよ。俺が連れてつてやるぞ。立て立て。」

「あつこはとても駄目つて。」

「あくもあかんもあるもんか。手前、あつこへのたり込むのが当り前じや。」

「あかん、あかん。」と云つて安次は頭の横で泳ぐように両手を振つた。

「ぐずぐずぬかすな！」

秋三が安次の首筋を持つて引き立てると、安次は胸を突き出して、「アツ、アツ。」と

苦しそうな声を立てた。

「早よ歩けさ。厄介な餓鬼やのう！」

「腹へつて腹へつて、お前、負うてくれんか！」

「うす汚い！ 手前のようなやつ、負えるかい。」

安次は片手で胸を圧えて、裂けた三尺のひと端を長く腰から垂らしたまま曳かれていつた。痩せた片肩がひどく怒つて見えるのは、子供の頃彼の家が、まだ此の村で安泰であつた時と同じであつた。そして、まだ変らぬものは、彼の姿を浮かばせている行く手に固まつた安泰な山々の姿であつた。

#### 四

西風が吹いて來た。勘次は桑の根株を割つて風呂場の下を焚きつけた。煙は風呂場の下から逆に勘次の眼を攻めて、内庭へ舞い込むと、上り框から表の方を眺めている勘次の母におそいかかつた。と、彼女は、天井に沿つている店の缶詰棚へ亂れかかる煙の下から、「宝船じや、宝船じや。」と云いながら秋三が一人の乞食を連れて這入つて來るのが眼に

留まつた。

「やかまし、何じや。」と彼女は云つた。

「伯母やん、結構なもんが着いたぞ、喜びやれ。」

勘次の母は店の間へ出て行つて乞食の顔を見た。

「まあ珍しい、安次やないか！」

「安次も提灯もあつたもんか、えらい高次じや。」

秋三は店の間をぐるりと見廻した。が、勘次に逢うのが不快であつた。彼はそのまま、帰ろうと思つて敷居の外へ出かけると、

「秋公<sup>帰</sup>いぬのか？」と安次が訊いた。

「もう好えやろが。」

「云うてくれ、云うてくれ。」

「云うてくれつて、お前宝船やないか、ゆつくりそこへ坐つとりや好えのじや。」

「こらこら、俺も行くぞ。」

「阿呆ぬかせ！ 伯母やん、此奴どつこも行くとこが無うて困つとるのやが、ちよつとの間、世話してやつとくれ。」

「そんなこと云うて来てお前。」

と勘次の母が顔を曇らせて云いかけると、安次は行司が軍扇を引くときのような恰好で、「心臓や、医者がお前、もう持たんと云いさらしてさ。」

「どうしてまたそんなになつたんやぞ？」

「酒桶から落つてのう。亀山で奉公して十五円貰うてたのやが、どだい、こうなつたらもうわやや。医者が持たん云いさらしてさ、往生したわ。」

「ふむ、それは気の毒なことやなア、長いこと見んで、私やもうすつかり見忘れて了うたわ。何年程になるなア？」

「九年や。」

「もうそんなになるかいな、幾つやな、そうすると四十？」

「四十二や。」

「四十二か。まあ厄年やして。」

「厄年や、あかん、今年やなんでも厄介にならんならん。」

「そうか、四十二か、まあそこへ掛けやえせ。そして、亀山で酒屋へ這入つてたのかな？」

「酒屋や、十五円貰うてたのやが、お前、どつと酒桶へまくれ込んでさ。医者がお前もう

持たんと云いさらしてのう。心臓や、えらいことやつたわ。」

秋三は勘次の姿が裏の水壺の傍で揺れたのを見ると、黙つて少し足音を忍ばせる気持で外へ出た。が、勘次を恐れている自分に気附いたとき、彼は一寸舌を出して笑つたが、そのまま北の方へ歩いていった。

勘次は裏庭から店の間へ来ると、南天の蔭に背中を見せて帰つて行く秋三の姿が眼についた。

「今来たのは秋公か？」

「お前、秋が安次を連れて来てくれたんやがな。」

安次は急に庭から立ち上ると、

「秋公、こら、秋公。」と大声で呼び出した。

勘次は秋三に逢いたくはなかつた。

「安次が、えらく年寄つたやないか。」と彼は安次の呼び声を遮<sup>ささえぎ</sup>つた。

「うん、こう鼻たれるようになつたらもうあかん。帰れたもんやないけれどさ。とうとうやられてのう。心臓や。お前医者めが持たん云いさらしてのう。どうもこうもあつたもんやない。このざまやさ。」

「どうした？」

「酒桶からまくれでお前、ここやられてのう。」安次は胸を押えてみせた。

「ふむ、よう死なんでこつちやして？」

「死にやお前結構やが、運の悪い時や悪いもんで、傷ひとつしやへんのや。親方に金出さそうと思うたかて、勝手の病氣やぬかしてさ。鏃<sup>びたせん</sup> 錢一文出しやがらんでお前、代りに暇出しやがつて。」

「そうか、道理で顔が青いって。」

「そうやろが。」

「そしてこれから何処行きや？」

「何処つて、俺に行くとこあるものか。母屋に厄介になろうと思うて帰つて来たのやが、秋公がお前、南の家は株内やぬかして、引っ張つて来よつたのや、ほんまに済まんこつちや。」

「秋が連れて來たんか？」

「うん、秋がお前、株内はここだけや云いよつてさ。」

「母屋へ行け母屋へ。かまうか、俺がつれてつてやる。あいつ、ほんまに猾ずるい奴や！」

「お前頼んでくれんか？」

「ええとも、あの餓鬼つたら、仕様のない奴や。」

「そうしてくれのう。土産も何もあらへんけど、二円五十銭持つてのやが、どうにかならんかのう？」

「要るもんか。」

「要らんか、頼むぜ。」

「行こ行こ。」

「ちよつと待つてくれ、お霜さん、飯ないかなア、腹へつて、腹へつて。」

「飯か？ 今頃お前、夕飯前でこれから焚くとこやがな。」

「ちよびつとでも好えがな。<sup>え</sup>」

「じや見て来てやるわ。」

お霜は台所へ這入つた。勘次は表へ出て北の方を眺めてみたが、秋三の姿は竹藪の向うに消えていた。彼は又秋三とひと争いをしなければならぬと思つた。そして、胸の中で、自分は安次を引取ることに異議を立てるのではなく、秋三の狡猾さに立腹しているのだと理窟も一度立ててみた。が、事実は秋三や母のお霜がしたように、病人の乞食を食客に

置く間の様々な不愉快さと、経費とを一瞬の間に計算した。

お霜は麦粉に茶を混ぜて安次に出した。

「飯はちょっともないのやわ、こんなもんでも好けりや食べやいせ。」

「うかな、大きに大きに。」

「塩が足らんたら云いや。」

「結構結構。」

安次は茶碗からすが眼を出して口を動かした。

「こりやええ、麦粉かな？」

「こりや麦や、塩加減はええか？」

「上加減や、こりやうまい、お霜さん、わしは酒加減はよう味るぞな、一時亀山でや、わしがおらんと倉が持ていでのう。」

勘次は安次を待つのが五月蠅うるさかつた。ひとり出かけて行つて秋三の狡さを詰ろうかとも思つたが、それは矢張り自分にとつて不得策だと考えつくと、今更安次を連れて来てにじり附けた秋三の抜け目のない遣方に、又腹立たしくなつて來た。

安次は食べ終ると暫く缶詰棚を眺めながら、

「しげは <sup>う</sup>美味しいもんや。」とひとり言を云つた。

煙は又風呂場の方から巻き込んで来た。お霜は洗濯竿の脱れた音を聞きつけて立ち上つた。

「お霜さん。煙草一ふく吸わしてくれんかな。」

「安次、行くぞ。」勘次は云つた。

「お前ひとりで行つて来てくれんかよ。」

「お前、行かにや何んにもならんが。」

「もうお前、ひ怠だるてひ怠るて歩けるか。」

「たつたそこまでやないか、向うまで行つたら締めたもんや。お前図々しい構えてりやことがあるかい。」

「堪こらえてくれ。もうもうお前、今夜あたりでも参るかもしけんのじや。」

「そんなことを云うてらちがあくか。」

「こらかなわんのう。」

「行こつて、行こつて、悪るうなりや俺が引き受けてやろぞ。」

「もうお前。」

「行こ行こ、何んじや！」

勘次は安次の手首をとつた。安次は両足を菱張りに曲げて立ち上つた。

## 五

秋三は麦の種播きに出掛けようと思つていた。が、勘次が安次を間もなく連れて来るにちがいなかろうと思わるとそう遠くへ行く氣にもなれなかつた。で、彼は軒で薪を割りながら暇々に家の中の人声に気をつけた。

よく肥えた秋三の母のお留は古着物を背負つて、村々を廻つて帰つて來た。

「今日は馬が狸橋から落ちよつてさ。」

彼女は人の見えない内庭へ這入つて大声でそう云うと、荷を縁に下ろして顔を撫でた。

が、便所へ行く筈だつたと氣が附くと、裾を捲つて裏口へ行きかけたが、台所の土瓶が眼につくと、また咽喉が渴いているのに気がついた。彼女は土瓶を冠かぶつて湯を飲んだ。そこへ勘次が安次を連れて這入つて來た。

「秋公いるかな？」

「お前今日な、馬が狸橋の上から落ちよつてさ、そりや**えら**豪いこつちやぞな。」とお留は云つた。

「秋公はな！ 今俺とこへ来よつたんやが。」

「知らんぞな。わしや今帰つたばつかりやが。お前、馬が横倒しにどぶんと水の中へはまりよつたら見い、馬つたら**えら**豪いものや。くれんといつぺんに起き返りよるな。ありや！ 何んじや、お前安次やして！」

「さつき来たんやが、お前いやせんだ。」

安次は怒つた肩を撫でながら縁に腰を下ろした。

「どうしてのや？」

「どうつて見た通りのぞまや。」

「そうか。安次か。長いこと何処へ言つてたんや！」

「亀山や。」

「亀山か、近いところにいたんやして、お前何んじやぞ、それ瘦せて！ 死神に憑かれた

みたいやないか。」

「あかん。」

「あかんつて、どうしたんやぞ。」

「医者がもうお前、持たん云いさらしてさ、心臓や。どだいわやや。」

「心臓や、それは困つたことやないか。まあ待つとくれ。」

お留は周章てて廁へ行つた。そして、戻るとき戸棚の抽出しから白紙を出して、一円包んで出て来ると安次に黙つて握らせた。

「あかんのや、あかんのや、もうそんなことして貰うたて。」と安次は云つて押し返した。

しかし、お留は無理に紙幣を握らせた。「薬飲んでるのか？」

「いいや、此の頃はもう飲みとうない。」

「叔母やん、秋がさつき来てな、安次を俺とこへ置いとけつて云うのやが、俺とこは困るぜ。」と勘次はきり出した。

「何んやぞ？ わし一寸も知らんが。」

「秋公はひどい奴や、こんな病人を俺とこへ無理に引つ張つて来てさ。」

「そうかな、あいつ何処へ行つとのやろ。」

「ほんとにはいつは酷い奴やぞ、わざわざ母屋へ頼つて来てるのに、俺とこへ連れて来て、何ぼ何でもあんまりや！」

「わしとこにいりやええわして。」

「阿呆ぬかせ！」と秋三は裏口から叫んで這入つて來た。

「秋公、お前、ひどすぎるやないか。」と勘次は云つた。

「何がひどい。手前とこは株内や、株内が引きとるのに何の不足がある。」

「お前こそ母屋やないか。母屋のなりして、株内へ廻すつてことがあるかい。」

「母屋や、阿呆たれよ、どこがどう母屋や。それを検べてから云うて來い。」

「安次が母屋母屋云うてりや、それで分つてるこつちや。何も母屋やないもの頼つて来る理窟があるか。」

「そんなもの、何代前の母屋かしれたもんか。俺とこが母屋やつたら、何処でも母屋や。こんな死にぞこないの、油虫みたいな奴は、どこへへたばりさらすか知れるかい。」

「もう止さえせ。昼日中喧嘩して！」とお留は口を入れた。

「お母ア、黙つとりやええんじや。」

「秋公頼むわ。どこへでもええで寝さしてくれよ。」と安次は云つた。

「ぬかしてよ。汝や汝で、何ぜ俺とこを母屋やなんてたれるのや。どこで聞いて來た。他ひ家んとこへ来るなら来るで、ちやんとして來い。」

「そんなに大つきな声出さんでも、ええわして。」とお留は云つた。

「いいや、声でも嚇おどしつけんと、こんな奴、何さらすかしれん。」

「阿呆なこと云うてんと、置いといてやらえな。」

「こんな奴置く位なら、石の頭巾冠つてる方が、ましじや。」

勘次は今が引き時だと思った。そして、そのまま黙つて帰りかけると、秋三は彼を呼びとめた。

「勘公、此奴をどうするつもりや。」

「どうするつて、こちや知らんわ。」

「知らん！ もういつぺん云うてみよ。」

「こちや知らんてことよ。」

勘次は後も見ずに帰つていつた。秋三は勘次の後を追い馳けようとして一二三歩進んだが、

又引き返すと、縁へごろりと横になつている安次の襟を持ってひき起した。

「寝さらして、こら！」

「もう勘忍してくれ。」

「勘忍も糸瓜へちまもあるかえ。南へ行きやがれ南へ。」

「もうお前、へたばるが。」

「立てつたら、立ちさらせ。」

安次は蹲んだまま怒った片肩をお張り上げて、戸口までずるずる引き摺られた。

「そんなことせんと、ここで休ましといてやらえな。」とお留は云つた。

「何アに此の餓鬼、にせびよう 賢病 使うてくさるのや、あつこまで歩けんことあるものか。」

「痛いが、痛いが、痛いたら！」と安次は云つた。

「やかましい、歩け歩け！」

秋三は忙しそうに安次を曳いて、勘次を見守りながらまた南の方へ下つて行つた。

お留は安次に渡した一円の紙幣が庭に落ちているのを見ると、走つて行つて渡そうかと思つたが、しかしそれでは却つて追い出すようでいけないし、

「まあ好えわア。」と彼女は呟いた。

それより此の次もう一円増してやる方が、息子の無情な仕打ちを差し引いて功徳になる  
ように思われた。彼女は台所へ戻ると又土瓶を冠つて湯を飲んだ。

勘次は後から追つて来る秋三の視線を強く背中に感じ出した。足がだんだんと早くなつた。それに何ぜだか後を見ていることが出来なかつた。竹藪を廻ると急に彼は駆け出したが、結局このままでは自分から折れない限り、二人の間でいつまでも安次を送り合わねばならぬと考えついた時には、もう彼の足は鈍つていた。そして今逆に先手を打つて、安次を秋三から心良く寛大に引き取つてやつたとしたならば、自分の富の権威を一倍敵に感ぜしめもし、彼の背徳を良心に責めしめもする良策になりはしないか、と考えついた時には、早や彼は家に帰つて風呂の湯加減をみる為に、一寸手さきを湯の中につけていた。が、更に又彼は自分の愛人の姿を思い浮べて考えた。もしそうして彼女が自分の博愛を聞き知つたとしたならば？ それは確に幸福な婚姻の日を、早めるに役立つことになるだろう。

秋三は着いた。不足な賃銀を握つた馬丁のよう荒々しく安次を曳いて、  
「勘次、勘次。」と呼びながら這入つて來た。勘次は黙つて出迎えた。

「これ勘公、逃げさらすなよ。」

「遠いところを済まんのう、何んべんも。」

秋三は急に静な微笑を浮べた勘次のその出方が腑に落ちかねた。

「安次、手前ここに構えとれよ。今度俺とこへ来さらしたら、殴打しまくるぞ。」

安次は戸口へ蹲んだまま俯向いて、

「もうどうなとしてくれ。」と小声で云つた。

「当分ここにおつたらええが、その中に良うなろうぜ。」

そう勘次が静に云うと、安次は急に元気な声で早口に、

「すまんこつちや、すまんこつちや。」

と云いながら続けさまに叩頭こうとうした。勘次は落ちつけば落ちつく程、胸の底が爽やかに揺れて來た。が、秋三は勘次の氣持を見破ると、盛り上つて來た怒りが急に折れて侮辱の念に變つて來た。と同時に安次の弱さに腹の底から憎惡を感じると、彼の掌はいきなり叩頭している安次の片頬をびしやりと打つた。

「しつかり、養生しやれ。」

秋三は嘲弄した微笑を勘次に投げた。

「ええか、頼んだぞ。」と彼は云うと、威勢好く表へ立つた。

勘次は秋三の微笑から冷たい風のような寒さを感じた。彼は暫く庭の上を見詰めたまま動けなかつた。

「すまんこつちやわ、えらい厄介かけてのう、大きに大きに。」

勘次も安次に叩頭されればされる程、不思議に安次を軽蔑したくなつて來た。彼は黙つて裏の井戸傍へ立つて來た。が、秋三の冷たい微笑を思い出すと身體が竦んで固まつた。彼は秋三に追いついて力限り打ちのめしてしまひたかつた。恋人との婚姻もこのまま永久に引き延ばしていたかつた。そして、安次を最も殘忍な方法で放逐して了つたならば、彼は秋三の嘲笑を一瞬にして見返すことが出来るようと思われた。

## 七

安次は股引の紐を結びながら裏口へ出て來ると、水溜の傍の台石に腰を下ろした。彼は遠い物音を聞くように少し首を延ばして、癪ついた幽かな笑いを脣に浮かべながら水菜畠を眺めていた。数羽の鶏の群れが藁小屋を廻つて、梨の木の下から一羽ずつ静に彼の方へ寄つて來た。

「好えチヤボや。」と安次は呴いて鶏の群れを眺めていた。

お霜は遅れた一羽の鶏を片足で追いつつ大根を抱えて藁小屋の裏から現れた。

「また来たんか？」

「また厄介になつたんや、すまんが頼むぞな。ええチャボやな。こいつなら大分大つきな卵を産みよるやろ？」

「勘はな？」

「さア、今そこにうろうろしていらつたが。」

安次は三尺の中から丸めた紙幣をとり出した。

「お霜さん。これ持つててくれんかな。二円五十銭あるのやが、何ぞの足しに、ならんかな。」

「そんなにたんと預かつておいて、お前使うて了うたらどうするぞ。」と、お霜は笑つて云つた。

「何アに使うて貰うたら結構や。持つててお呉れ、使い残りで悪いけど、それだけばち有りやせんのや。」

「まあお前持つてやいな。お霜さんが安次の金とつたなんて云われると、こちや困るわ。お霜は家の中へ這入つて大根を切つた。安次はまた三尺の中へ紙幣を巻くと、

「トトトトトト。」

と呼びながら鶏の方へ手を延ばした。どこかで土を掘り返す鋤の音<sup>すき</sup>がした。菜園の上から白い一条の煙が立ち昇つていて、ゆるく西の方へ靡いていた。

勘次は呴<sup>かます</sup>を抱えて蔵の中から出て来ると、誰にも相手にされず、台石の上でひとりぼんやりしている安次の姿が眼についた。それは弱々しいとり残された者の感じで不意に彼の心に迫つて來た。と勘次は急に今までと全く違つた愛情を安次に對して感じ出した。

「安次、今晚は御馳走を食わそうか、よう？」

「いいや、もう結構や。」

「風呂が沸いてるぞ、お前這入らんか？」

「あかんのじや、あいつに這入ると、やられるんじや。」

「そうかて、いつまでも這入らずにいられまいが。」

「何アに、もうお前かれこれ二ヶ月這入らんが。」

「三ヶ月よ？」

安次はまた三尺から紙幣を出すと近寄つて來た勘次にそれを差し出した。

「お前これ持つてくれんかのう。二円五十銭あるのやが、何んどの足しになるやろぜ。自分で持つてりやええやないか。」

「こんなものの、五月蠅うてしようがないが。」

勘次は安次の諂う容子を見るとまた不快になつた。そのまま内庭へ這入つて行つて呴を下ろすと、流し元にいたお霜が嶮しい顔をして彼の傍へ寄つて來た。

「お前まアどうするつもりや、あんな者連れ込んで来てさ。」

「抛つておいたええが。」

「抛つておけつて、たちまちお前どこへ置くぞ。汚い！ わしは知らんぞな。お前勝手に世話しやいせ。」

「ええが。」

「ええがも無いやないか。お前たちまちどこへ寝せるつもりや。食わす位ならまだ我慢もしそが、どんと寝附かれて動きもこじりも出来んようになつたらどうするぞ！」

「抛つといたええつてば。」

「抛つといてそれで済むもんならええわさ。それより、お前どこで寝せるぞ、奥の間か？」

「小屋へ置いときやええ。」

「たあいもないお前、あんどこで死なれてみい。五月になつたら蚕さん夜養いせんならんのに誰が恐うて行くもんがあるぞ。お前の阿呆にもあきれるわ。」

よが  
こわ

「秋が連れて来たんやないか、秋に怒つたらええ。」

「秋つてあの餓鬼、どうも仕方のない奴や。ひとん所の恩も知りさらさんとからに、ひとん処へあんな者引っ張つて来やがつてな、わし私今晚喧嘩しまくつてやらんならん！」お霜は咳きながらまた大根を切つた。

「米を何んぼ出しとこう？」

「連れて来るものがないと、終いにやあんな乞食の病人引っ張つて来さらして！」

「米をよ。」

「一斗でええ。」とお霜はわが子に怒鳴り出した。

## 八

夜、お霜が秋三の家へ安次を連れて行くと云い出したとき、勘次は秋三の前でいかにも寛大に安次を引き取つた自分の態度を思い出した。これは困つた。しかし、安次を拒んでいるのは自分ではないと思うと気が休まつた。それに母親ひとりでとても秋三を説き伏せ終おせるものではないのを知ると、結局また安次は自分の家に落ちつくにちがいないと考

えた。でお霜が出掛けたゆくことには、余り親子争いをしたくなかった彼は、外見、自分も母親同様の考え方だと云うことを、ただ彼女だけに知らせるために黙っていた。が、安次を連れて行くことには反対した。けれども、自分のその気持を秋三に知らさない限り、自分の骨折りが何の役に立つだろう。そう思うと彼には秋三の罵倒が眼に見えた。が、また自分に安次を引き受ける気持のある以上、敵の罵倒に反抗し得るだけの力は、自然出て来るであろうと思われた。

## 九

秋三の母はひと笊豆ざるをむき終えた。そこへ姉のお霜は黙つて一人這入つて來た。

「姉やんか。丁度ええわ。あのな、生縄子きじゆすの丸帶が出たのやが、そりや安いのや、買わいせな。」とお留は云つた。

「それよりお前とこの秋つて、どうも仕様のない奴やぞ。株内やぬかしてからに、わしとこへお前、安次みたいな者引っ張つて來さらしてさ。お前とこが困るなら、わしここかて同じこつちや。」

「秋やいくら云うても聞きやせんのやして。あんな者の云うこと生しやいすな。」

「そうかて連れて来られたもの、黙つていられるかいな。」

「うちへ連れて来やいせ。何処かて同じこつちやがな。なア姉やん、中古でな、ほんまに持つて来いやが見せようか。織留のどこに一寸した汚点しみがあるのやが、二円五十銭にしどくわな。」

「要らん要らん。錢がないわ。」

「直ぐ売れてしまうで今やなきやあかんぞな。錢なんていつでもええわ。上村の三造さんの嫁さんに頼まれてるのやで、姉やんが要らんだら持つていくけど。」

「わしらそんなえ良えのしたかて、何処へも見せに行くところがないわ。」

「そんなこと云うてたら、裸体でいようかしらず、まあいつべん見てみやいせ。」

お留が奥の間へ立つていった後へ、秋三は牛の雜ぞうすい炊すいをきげて表の方から帰つて來た。

「秋よ、お前もお前やないか、どうどうわしとこへ安次をにじりつけてさ。」と、お霜は云つた。

秋三はお霜の來た用事を悟ると痛快な氣持が胸に拡つた。彼はにやにやしながら云つた。  
「にじりつけるか。勘が引受けよつたのやないか。勘に訊きいてみい、勘に。」

「連れて来んもの、誰が引受けるぞ。」

「そりやお前、お前とこが株内やで俺が連れて行くのはあたり前の話や。」

「お前株内や株内や云うけど、苗字みょうじが一緒やで株内やと定つてまいが、それに自分勝手に私とこへ連れて来て、たちまちわしどこが迷惑するやないか。」

「定つてら、あんな物に迷惑せんとこつて、あるもんか。」

「そんならなぜわし所へ連れて來た?」

「伯母やんみたいなしぶつたれや、あんな奴の世話、いつべん位しといてもええぞ。」  
「お前つて、ても焼いても食えん奴やぞ!」  
業ざらし。

「また喧嘩けんかしてゐるわ。もう止さえせ。」とお留は、帯を持つて出て来て云つた。

「こんなしぶつたれ婆と、誰が喧嘩するか。」と秋三は笑つて見せた。

「お前、黙つていやいて云うのにな!」

「こいつ、どうしたらええ奴やろ!」とお霜は秋三を睥にらんで云つた。

「姉やん見やいせ。良え光沢つややろが。汚点しみが惜しいことにちよつと附いてるのでな。」

お霜は差し出された丸帯を見向きもせず、

「いまに思いしらせてやるわ、覚えてよ。」とまた云つた。

秋三は「帰<sup>帰</sup>ね帰<sup>帰</sup>ね」と云うとそのまま奥庭の方へ行きかけた。

「何を云うのや！ 姉やん、あんな奴に相手にならんと、まア一寸此の帯を見やいせな。」「そんなもの、どうでもええわ。それよか、安次のことをきりつけんと私<sup>わし</sup>とこが困るわ。」「安次ならうちへ連れて来てたもれ。なア、手にとつて見てみやえな。中古でも夜さりやと新に買うたように見えようがな。」

「そんなら安次を連れて来るぜ。帯は後でゆつくり見せて貰うわ。」

「あかんぞ、あかんぞ！」と秋三は叫ぶと、奥庭から柄杓<sup>ひしゃく</sup>を持って走つて來た。

「うちへ置いといてやつてもええわして。」とお留は云つた。

「あかん。」

「そんなこと云うてたら、仕方あらへんやないか。」

「あかん、あかん。」

「おかしい子やな。あんな死にかけてる者、何処へ行くところがあるぞ、可哀想に。」

「あんな腐つた鰯<sup>いわし</sup>みみたいな奴と一緒にいたら、虫が湧くわ。」

「そんな無茶苦茶云うてんと。」

「あかんつたらあかん。南のが引き取りやそれでええんじや。」

「お前どこ虫が湧きや、わしどこでも虫が湧くわ。」とお霜は云つた。

「勘が引受けよつたんや。不足があるなら何処へでも抛り出しやええ。俺どこはもう関係があるもんか。」

「勘が引受けたつて、勘はお前、お前が無理に連れて來たで、置いたまでのことやないか。」

「どう云うたかよう勘にきいて來い。」

「勘は知らんと云うとつたが。」

「知らん？ よしつ、そんなら勘を呼んで來い。殴打しまくつてやるぞ。」

「秋よ、もう黙つていやいせ！」とお留は叱つた。

「いいや、勘の餓鬼、豪そうな顔して引受けやらしたくせに、そんなほざいたことをぬかしておなう、こちにも考えがあるわ。」

「ひちくどい！ もうええわして。」

「云うどこまで云わにやことが分るかい。勘を呼んで來い、勘を。」

「姉やん、もうこうなつたら本当にきりがないでな。姉やんどこ今晚ひと晩、安次を置いてやつとくれ。」

「そんな鳥籠桶へ足突つこむようなこと、わしらかなわんわ。」とお霜は云つた。

「ひと晩でええわ。そしたら明日どこぞへ小屋建てよう、清溝の柿の木の横へでも、藁でちよつと建てりやわけやないわして、半日で建つがな。」

「それでもお前、十五六円やそこらかからがな？」

「その位はそりやかかるわさ。そやけど瓦のかけらでもあるまいし、藁ばつかしで建てたら後が何など間に合うがな、なア、そうしようまいか？」

「藁かて二三十束も要るやないか。」

「そんなもの、高が知れてるわして。あんな安次みみたいな者を世話しといたら、功德になるぞな。」

「ひんなかで建つやろか？」

「そればつかしにかかりや半日で建つやろまいか。皆で建てよまいか。そしたら私やお粥位毎日運んでやるし、姉やんとこ拋つときやええわ。」

「そうしようか、藁三十束で足るかお前？」

「足るとも。三畳敷位の小つちやいのだけつこうやさ。それで安次も一生落ちつけるのや、有難いもんやないか。」

「あんな奴、抛つとけ。」秋三は笑いながら云つた。

「阿呆ばつかし云うて！」とお留は叱つた。

「あんな碌ろくでもない奴は、人目につかん処で死にさらしやええんじや。」

「お前はよつぱど罰あたりやぞ！」

「俺が罰あたりなら、南の伯母やら、とつくの昔罰あたつて死んでら。のう伯母やん？」

「あれ見やえ！」とお留は云つて姉を見た。

お霜は何か考えているらしく黙つていたが、

「お前、小屋建てるなら組で建てて貰うまいか？」と云い出した。

「組が建ててくれりや結構やけどなア。」

「そりや建てるわさ。いつへん組長さんに相談してみよまいか？」

「どうなと勝手にせ！」と秋三は云つて又奥庭の方へ這入つて行つた。

「そんなことしてると、またがてがて長びくでな。」とお留は云つた。

「そうかてお前、実の所は組が引きとらんならんのやして、お前とこが母屋や云うたて、そんなこと昔から云うてるだけで、何も特別と安次とこと交際してたわけでもなしき。うちかて株内や云うたてはつきりしたことつて何一つないのやし、組が引取らんならんのや。

なア そうやろう？ その間、わし処に安次を置いとくわ。」

「そんねにうまい工合にいくやろか？」

「まあ 事は何でもあたつてみよや。組長さんに相談してみよにさ。」

「そうしてみるか？」

「なア？ わし、これから行つて来るわ、事は何んでも当つて見よや。何んも母屋や株内や云うたかて名だけや。わし一寸これから行つて来うぞ。」

お霜は外へ出ていった。

「しぶつたれ！」と秋三は奥庭から叫んだ。しかし、勘次と反馳はんちしてゆくお霜の出方がますます彼を喜ばしめた。

「こりや面白い、こりや面白い。」と、秋三は膝を叩いて喜び出した。

お留は丸帯の汚点をランプの下に晒さらしてみた。小指の爪で一寸擦ると、

「こりや姉やんに持つて来いやがなア。」と云いながらまた奥の間へ這入つていった。

安次の小屋が組から建てられることに定つたと知つたとき、勘次は母親をその夜秋三の家へ送つたことを後悔した。しかし、今はもうその方が何方にとつても得策であるに拘らず、強いてそれを打ち壊してまでも自分は自分の博愛を秋三に示さねばならないか？いやそれよりも、一体秋三とは何者か？ そう思うと、彼は今一段自分の狡猾さを増して、自分から明らかに堂々と以後一家で負う可き一切の煩雜さを、秋三に尽く背負わして了つたならば、その鮮かな謀叛の手腕が、いかに辛辣に秋三の胸を突き刺すであろうと思われた。

彼は初めて秋三に復讐し終えたような快活な気持になつた。

## 十一

一週間の後、小さな藁小屋が掘割の傍に建てられた。そこは秋三の家に属している空地であつた。

その日最早や安次は自由に歩くことも出来なくなつていた。彼は勘次の家の小屋から戸板に吊られて新しい小屋まで運ばれた。

勘次は自分の手から全く安次が離れていったのだと思うと、今迄の安次に向つていた自分の態度は、全く秋三に動かされていた自分の頭の所作事であつたと気が附いた。けれども別に何の悔い心も起らなかつた。ただ彼は自分の博愛心を恋人に知らす機会を失つたことを少なからず後悔した後で、それほどまでも秋三に踊らせられた自分の小心が腹立たしくなつて來た。が、曾て敵の面前で踊つた彼の寛大なあのひと踊りの姿は、一体彼の心の何処へ封じ込まねばならないのか？　彼は次第に不機嫌になつて來た。

「厄介者が行つてくれたんで、晴々するわ。あんな者にいられると、こちまで病氣つくがな。」

お霜は安次の立つた後の掃除をしながらそう勘次に云つた。勘次は何ぜだか母親に突きかかつていきたくなつたが黙つていた。

「それでもお前のお蔭でみやいせ、蒲団三枚も損したわ。あの蒲団かて手織やが、まだそんねに着やせんのやぞ。お前ら碌なことしやせんのや。」

「好きで誰が連れて來る！」と息子は強く云つた。お霜は何ぜ息子が怒り出したのかを疑いながら、

「お前が要らんことせなんだら誰が來るぞ！」と云い返した。

「済んでから、ごてごて云うな！」

「云う云う。お前の阿呆にもあきれるわ。」

「勝手に饒舌しゃべつてよ！」

「要らんことばつかしてな。お前ら自家の財産減うちらすことより考えやせんのや。」

「安次の一疋やそこら何んじや。それに組へのこの出かけていつて恰好の悪いこと知らんのか！」

「何を云うのや、お前！」

お霜は勘次をじっと見た。

「しぶつたれ！」勘次は小屋の外へ出ていった。

お霜は何ぜ勘次が怒るのか全く分らなかつた。が、自分の吝嗇の一事として、曾て勘次を想わない念から出たことがあつただろうか？ 彼女は追つ馳けていつて自分の悩ましさを尽く勘次に投げかけてやりたくなつた。すると涙が溢れて來た。

お霜が安次の小屋へ行つてみたとき、もう組の人達は帰つていた。

「厄介ばつかしかけて、ほんまにすまんこつちや。」

安次はお霜を見ると弱々しい声で云つた。お霜は彼の声からいかにも有難そうな気持を感じると初めて愉快になつて來た。

「きょうは天氣がよいで氣持好かろが、ここにいたらお前、ええ隠居さんやがな。」

彼女は貸した安次の着ている蒲団を一寸見た。そして彼が死んでからまだ役に立つかどうかと考えたが、彼女の氣持が良ければ良いだけ、安次を世話した自分の徳が、死んだ良人の「あの世の苦しさ」まで滅ぼすように思われてありがたくなつて來た。彼女は入口の筵戸を捲き上げた。陽の光りは新しい小屋いっぱいに流れ込んだ。病人の頬や眼窩や咽喉の窪みに深い影が落ちて鎮まつた。お霜は床に腰を下ろすと、うつとりしながら眼の前に拡っている茶の木烟のよく刈り摘まれた円い波々を眺めていた。小屋の裏手の深い掘割の底を流れる水の音がした。石橋を渡る駄馬の蹄の音もした。そして、満腹の雀は弛んだ電線の上で、無用な轡さえすりを続けながらも尚おいよいよ脹ふくれて落ちついた。

「姉さん、すまんな、今お医者さんどこへ行つて來たんやわ。もう來てくれやつしやるやろ。」

暫くしてお霜はお留に呼び醒まされて彼女を見た。

「どうや、一寸はええか？」とお留は安次を覗いて訊いた。

「すまんこつちや、皆に厄介かけるなア。」

お霜は妹にそう云つてゐる安次の声からも感謝の氣持を見出した。そして、自分が預る「仏の利生」を、それだけ妹の方に分けられはすまいかと、今さら不安な氣持が起つて来ると、自分よりも先に医者を迎えて行つたお留の仕打ちに微かな嫉妬を感じて來た。

「何ぞ欲しいものはないか？」とお霜は安次に訊いた。

「結構や。」

「お前この間、錢持つてたの、どうしたぞ。それだけ欲しいもんでも買う方が好かろが？」

「火ん中へ燻べて了うた。」

「燻べた！」

「邪魔になつて仕様がない。」

「たあいもない。どうや、あんな物燻べて何んにもならんやないか！」

「もう半分気が触れてるのやぞ。」とお留は云つた。

二人は暫く安次の瘦せ衰えた顔を黙つて眺めていた。すると、どちらも同じように、病

人が最早や自分達と余程離れた不思議な遠い世界にいることを感じて恐ろしくなつて來た。が直ぐその後で、お霜は病人が紙幣を自分に預つてくれと頼んだとき、預つておけば好かつたと思つて後悔した。だが、お留は、安次に与えようとしてまだそのままにしておいた金包のことを思い出すと、今まで忘れていたのは結局自分に仏様がそれだけ授けて下さつたのだと思つて喜んだ。

### 十三

霜が降りた。夜が明け初めると間もなくその日は晴れ渡るであろう。山々の枯れた姿の上には緑色の霞が流れていた。いつもの雀は早くから安次の新しい小屋の藁わらすじ条を抜きとつては巣に帰つた。が、一疋の空腹な雀は、小屋の前に降りると小刻みに霜を蹴りつつ、垂れ下つた筵戸の隙間から小屋の中へ這入つていつた。

中では、安次が蒲団から紫色の斑紋を浮かばせた怒いかつた肩をそり出したまま、左右に延ばした両手の指を、縊くびられた鶴の爪のように鋭く曲げて冷たくなつていた。が、雀は一粒の餌さえも見附けることが出来なかつた。で、小屋の中を小声で囁りながら一廻りすると

外へ出て来て、また茶畠の方へ霜を蹴り蹴りびよんびよんと飛んでいった。

## 十四

野路では霜柱が崩れ始めた。お霜は粥を入れた小鉢を抱えたまま、

「えらいこつちや、えらいこつちや。安次が死んどる。熱いお粥食わそう思つて持つててやつたのに、死んどるわア。」と叫びながら、秋三の家の裏口から馳け込んだ。

お霜の叫びに納戸からお留が出て來た。秋三は藁小屋から飛び出て來た。そして二人が安次の小屋へ馳けて行くと、お霜はそのまま自分の家へ馳けて帰つて勘次に云つた。

「お前えらいこつちや。安次が死によつた。折角お粥持つててやつたのに、冷とうなつて死んどるのやして。」

「死によつたか！」

「えらいこつちや、えらいこつちや。」

お霜は小鉢を台所へ置くと、さて何をして好いものかと迷つたが、別に大事な出来事が起つたのでもなく、ただ自分ひとりが勝手に狼狽うろたえているのだと気が附いた。が、その狼

狼えたどこかには、常より却つて晴やかな氣持が流れていたことには彼女とても氣附かなかつた。

## 十五

勘次とお霜は直ぐ又安次の小屋へ行つた。勘次は初め秋三と顔を合すのが不快さに行きたくはなかつたが、それは却つて秋三を恐れているようでいけないし、とうとう何時の間に決心したのか自分ながら分らずに、ただ母親に曳かれる氣持で小屋へ來た。

「おい、喜びやれ、往生しよつたぞ。」

秋三は勘次を見るなり皮肉な微笑を浮かべて云つた。

勘次は彼の微笑から曾て覚えた嘲弄を感じると、憤りが胸に込み上げた。が、それを見抜かれるのが不快であつた。彼は入口に下つていた筵戸を引きちぎつて、

「こんな邪魔物は要らんやろが。」とゞまかした。

「伯母やんに訊いてみよ、神棚へでも吊らつしやろで。」

勘次は秋三を一寸睥にらんだが、また黙つて霜解けの湿つた路の上へ筵を敷いて上から踏ん

だ。

「さアお前らぼんやりしてんと、どうするのや？」とお霜は云つた。

「和尚さん呼んで来うまいか。」とお留は云つた。

「それよか何より棺桶や。棺桶どうする？」と秋三は云い出した。

「うちのお父つあんの死んだときは棺桶やつたが、あれでもお前、八円したぞな。」とお

霜は云つた。

「六分板やろが。あれならその位かかるわさ。杉の四分板やつたら五円位で出来るやろ。」とお留は云つた。

「大分苦しみよつたらしいな。」

勘次は安次の紫色に変つてゐる指さきを弄びながらそう云うと、

「苦しかつたやろまいか。可哀想に、水いっぱい飲ましてくれる者がありやせんしさ。」

とお留が云つた。

「やつぱり極道すると、碌な死にざま出来やせんなア。」とお霜は云つた。

「棺桶どうする。」と秋三はまた云い出した。

「箱棺で好かるが。あれなら三円位で出来るしな。」

「寝棺はどうや、もつと安かろが？」

「寝棺は高い高い。どんねに安うても十両はかかる。」

「そうか。そんなら箱棺の口や。どうや伯母やん。ひとつ奮発してくれんか？」

「伯母やん。伯母やんつて、損のいくことやつたら、何んでもわしににじりつけるのやな。わしとこはもう、蒲団出したやないか。お前とこしてやれ。」

「そうかて、本当に勘が何もかも引き受けよつたんやないか。そのくせ組へにじりつけて了うてさ。棺桶ぐらいしてもええぞ。」

「うちののがしたらええわして。」とお留は秋三をたしなめた。

「俺がする。」と勘次は云おだつた。

「それみよ。」と秋三は煽おだてて云つて、勘次の額に現れ始めた怒りの条を見れば見る程、ますます軽快に皮肉の言葉が流れそうに思われた。

「勘よ、うちにビール箱が沢山あつたやろが、あれで作つたらどうやろな？」とお霜は云い出した。

秋三はにやにや笑いながら、

「そいつは好え。あれなら八分板や、あんなもんでして貰うたら、それこそ極楽へ行きよ

るに定つてゐる。やつぱり伯母やんやなけりや、ええ考えが出て来んわ。」

「なア、あれはほんとに好かろが、三つ位で出来るやろ。」

「二つでええとも。あれでして貰うたら、安次もなかなか腐らへんわ。そりや結構や。」

とお留は云つた。

「勘よ。お前これから帰んで、一寸拵えてこしら来てくれんか。」

勘次は黙つて帰つて來た。母親が煽動に乗せられているのを思うと、別に大工の手にかけて棺を造ろうかと思つた。が、しかし一々秋三に反抗するのもあまり大人氣ないようと思われた。が、何かにつけて自分の弱味——安次を組の手に押し附けたと云う此の弱味、それは自分の知らないことだと彼一人拒否したとて免れないその点に、——絶えず触れて出ようとする秋三の態度には我慢がしきれなかつた。彼は棚からビール箱を下ろすと、一枚一枚釘打で板を放した。放しながら、秋三を叩いている所を想像すると、尚お彼の力は加わつた。

「此の餓鬼！　此の餓鬼！　此の餓鬼！」

彼は釘打を振り上げては打ち下ろした。すると、自分が棺を造つてゐるのだと云うことも忘れて了つて、だんだん加わつて來る氣持良い興奮の中に、間もなく彼は三つの箱をば

らばらの板切れにして了つた。そして、一時間の後には旭の紋の浮き上つた四角い大きな箱棺が安次の小屋へ運ばれていた。

## 十六

「こりや上等や。こんななんなら俺でも這入りたいが。どうや伯母やん、一寸這入つてみやえ。」と秋三はお霜に云つて、勘次の造つて来た箱棺を叩いてみた。

「冗談云わんと、早よ安次を入れてたもれ。」とお霜は云つた。

「こんな汚い奴、俺や知らんぞ。」

「何でも知らん知らんと云うてよ。」

お霜は安次の蒲団を捲つて、「早う。」と秋三を促した。

「おい、搔き込もうやないか、汚い。」

秋三は勘次にそう云つて棺を横に倒すと安次の死体の傍へ近寄せた。

二人は安次の身体を転がしながら、棺の中へ搔き寄せようとした。が、張り切つた死人の手足が縁に間にかれて嵌らなかつた。秋三は堅い柴を折るように、膝頭で安次の手足の関節

をへし折つた。そして、棺を立てるとき身体は「そり」と音を立てて横さまに底へすべりつた。

秋三は棺を一人で吊り上げてみた。

「此奴、軽石みたいな奴や。」

「そやそや、お前今頃から棺桶の中へ入れたらあかんがな。お医者さんの診断書貰うて、役場へ死亡届出さにや叱られるわして。」とお留は云つた。

「そんなら、もういつへん打ちやけるか？」

秋三はお霜を眺めてそう訊くと、お霜は安次の着ていた蒲団を摘まみ上げて眺めた。「そんな汚い物、焼いて了え。」と秋三は云つた。

「よう云うてくれるな。これでもお前、洗濯してちゃんとしたら、結構間に合うわ。」

「まだそれでも、着て寝よう思つてるのやな。」

「きまつてるわ。」

「しぶつたれ！」

「何がしぶつたれや！」

「まあまあ伯母やんみたいなしぶつたれて、あつたもんやないわ。」

すると、お霜はいつになく厳しい眼付で秋三を睥みながら腰を延ばした。

「よう云うな！ われ汝や自分の棟の下で飯が食つていけるのは、誰のお蔭やと思うてる。此のしぶつたれの伯母が有つてこそやぞ。それも知りさらさんとからに、渋つたれ渋つたれつて一寸は人の恩も考えてから云いや！」

「ぬかしてよ！ 僕どこが恩受けてるのは、手前とこの親父にじや。」

「わしがいなんだら、誰がお前らに恩を施すぞ！」

「恩恩つて、大つきな声でぬかすな！ 手前とこが有るばつかしで、俺とこまで穢けいしやがつて、そんな恩施しなら、いつなと持つていけ！」

勘次は怒りのために慄ふるえ出した。と、彼は黙つて秋三の顔を横から殴打うつた。秋三は踉よ踉めいた。が、背面の藁戸を掴んで踏み停ると、

「何さらす。」と叫んで振り返つた。

再び勘次は横さまに拳こぶしを振つた。秋三は飛びかかつた。と忽ち二人は襟を握つて、無数の釘を打ち込むように打ち合つた。ばたりと止めて組み合つた。母親達は叫びを上げた。

彼女達は、夫々自分の息子を引き放そうとした。が、二人の塊りは無言のまま微かな唸りを吐きつつ突き立つて、鈍い振子のように暫く左右に揺れていた。

「此の餓鬼めッ。」

「くそつたれツ。」

勘次の身体は秋三を抱きながら、どつと後の棺を倒して蒲団の上へ顛覆した。安次の半身は棺から俯伏に飛び出した。四つの足は跳ね合つた。安次の死体は二人に蹴りつけられる度毎に、へし折れた両手を振つて身を踊らせた。と、間もなく、二人は爆ぜた栗のよう飛び上つた。血が二人の鼻から流れて來た。

「エーイくそツ。」

「何にをツ。」

二人は再び一つに組みついた。と、また二人は安次の上へどつと倒れると、血に濡れながら死体の上で蹴り合い出した。

(大正十年)



## 青空文庫情報

底本：「日本文學全集 29 横光利一集」新潮社

1961（昭和36）年2月20日

1966（昭和41）年12月30日15刷

初出：「人間」

1921（大正10）年2月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、  
底本の表記をあらためました。

入力：ウィルキンス 賢侍

校正：米田

2012年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作成されました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 南北

## 横光利一

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>